

# 半世紀のときを経て —文学界大御所等の随筆再掲載—

前号(No.七〇)の「カパーロマン」で紹介しましたが、「銅」誌創始期においては、我が国の文学界等を代表する方々に随筆などの執筆をお願いして本誌に毎号掲載しておりました。

これらのバックナンバーは現在、日本銅センターの書棚に保管されていますが、いずれも高名な方々による書き下ろしであり、この貴重な財産をこのまま眠らせておくのは勿体ないとの思いに駆られていたところ、昨年、本誌が発行五十周年を迎えたことを契機に、関係者の皆様に広く楽しんでいただくという機運が高まり、本号より再掲させていただくこととなりました。

紙面の都合上、全てを紹介することはできませんが、今後、「銅」誌のシリーズ物として、数回に分けて掲載いたします。今回は初回でもあるので、特に銅に関連付けて執筆いただ

いた三氏(獅子文六、井伏鱒二、横山隆一)の随筆を紹介します。約半世紀の時を経て再び「銅」誌に蘇える偉人たちの作品をお楽しみ下さい。

高度経済成長期とはいえ、一業界の機関紙に文学界等の多数の大御所が執筆協力を行うことなど通常考えられないことですが、そこには、当時の日本伸銅協会及び日本銅センターの専務理事であった故・和田忠朝氏(詩人でもあり、戦後のヒット曲「ダンスパーティーの夜だった」の作詞家)の多岐に亘る人脈と指導力、そして編集関係者の並々ならぬ情熱とご苦勞が背景にあつたことを付記いたします。あらためて先輩方の偉業に深甚なる敬意と謝意を表する次第です。

社団法人 日本銅センター

専務理事 日高俊信

## 時代を映す歴代の銅誌

新・銅/COPPER & BRASS



銅(銅と生活/銅と技術)



ブラス/BRASS



# カルメラ

獅子文六



銅の鍋というものは、日本でも西洋でも料理の職人が使い、素人は敬遠するが、恐らく、手入れが厄介だからだろう。

でも、よく磨かれたアカの大鍋など見るから、うまい料理を連想させる。

私の子供の時のことを考えると、まだ、アルミ製品は少なかったが、鉄鍋が多く、タマゴ焼きの道具だけが、銅製だった。でも、その他に、アカの小さな鍋があり、それは、私専用でした。

カルメラという菓子をつくるための鍋である。カルメラは、カルメラ焼とも呼び、砂糖ばかりでつくるのだが勿論、これはキヤラメルキャラメルの転訛だろう。外国では、キヤラメルといえば、例の菓子のことではなく、砂糖を焦がしたものの意味である。

その銅製の小さな鍋に、昔はザラメ砂糖三分の二と、黒砂糖三分の一くらいを加え、長火鉢の火の上で、熱すると、ベッコベッコ色の餡になる、その頃合いを見て、小さな棒の先きに重曹をつけて、かき廻すと、三倍くらいに膨れ上ってくる。その時に、

鍋を火から降すと、カルメラが一丁上りということになる。

ところが、その手加減がむづかしい。ことに、私は不器用であって、成功したことは、十回に一回だった。重曹を入れて、膨れ上らせるまでは、誰でもできる芸当なのだが、それから先きがむづかしい。どうむづかしいのか、今もって会得できないのだが、とにかく、切角、膨れ上がったものが、また、シユンシユンと、萎しぼんでしまうのである。

失敗したカルメラも、食べれば食べられないことはないが、固くて、独得の歯さわりがない。第一、カルメラの形を成さない。しかし縁日へ行つて、カルメラ屋の前に立つと、そのオジサンの手際は、見惚れるほどだった。勿論、一回だって、失敗しない。そして膨れ上ってきた時に、紙のコヨリを、ちよいと挿す。カルメラは軽く、壊われ易いから、携帯に便なように、そんなことをする。それでも、手順が狂わず、失敗もしないのは、まるで神業のように見える。

ハさし絵・御正 伸V



画・三芳悌吉

## 黄銅 鉦

井伏鱒二

いろいろな鉦石のうち、素人目には黄銅鉦が一番きれいだそうだ。私も鉦石のことは知らないが、坑道から出された、あの黄銅鉦はきれいだと思う。金粉をちりばめたようにきらきら光っている。嗅い

で見、つんと鼻に来るあの鉦石くさい匂いには一種情緒がある。

いつか熱海へ行ったとき、埋立地寄りの料亭の主人から隕石を買った。紡錘形の北海道かばちほどの大きさで、ニツケルのような金属の結晶が壊っていたが嗅いでみると微くさい匂いがした。熱湯でよく洗っても鉦石くさい匂いがしなかった。それをリュックサックに入れ、熱海から富士駅経由で甲府に行き、富士吉田行きバスで御坂峠の茶店に寄った。

この茶店の主人は狐が好きである。折から裏山へ兎を撃ちに行っていたが、狐がなかったから代りに鉦石を採って来た。と云って黄銅鉦のかけらを見せた。金粉をちりばめたようにきらきら光り、素人目には五割も六割も銅を含んでいるような外見である。

「これは大変なものぢやないか。東京へ持って帰って誰かに分析して貰ってやろう。」  
そう云って、私はその鉦石を隕石と一

緒に持って帰った。

茶店の主人の話では、黄銅鉦の鉦脈は沢のところ約四十間の幅で斜に露頭を見せている。それを腰に吊した鉦の背で打ち砕いて持ち帰ったそうだ。だから幾分か風化した部分を探って来たことになるわけだが、断面のところはきらきら光って相当な含有量を持っているように思われた。茶店の主人もおふみさんも喜んで、偶然にも一とやま当てたことになりそうだと云っていた。

私はその黄銅鉦の分析を阿佐ヶ谷の佐藤清さんに依頼した。この人は若手県の久慈郡というところのマンガン鉦山を経営し、鉦石の分析を心得ているが、大事をとって千葉の鉦石分析所に依頼してくれた。その結果は、甚だお気の毒ながら、貧鉦だという報告がきた。しかもななめに露頭が走っているのは底が浅いということであった。

私も止むなく、甚だお気の毒ながら、貧鉦だそうだと茶店の主人に報告の手紙を出した。それに対して茶店の主人から手紙がきた。

「がっかりしました。しかし、お手紙を、まっ一週間というものの、私たち夫妻は、やま当てた気で、いろいろ楽しいことを語りあったものでした。幸福な一週間でした。有難うございました。」

私としては、罪なことをしたような気がする。

## 銅像

### 横山隆一

私は好きである。

ローマへ行った時も大理石の有名な彫刻類を見ると同時に台座の上に立つ名將の銅像を見て旅愁のような感じがいをもよぶ。

西欧には銅像が多いし、芸術としてはすぐれたものではないかも知れないが町の重要なアクセサリになっている。

私は銅像に興味をもっている。それは私が銅像製作の所へ弟子入りした事にも関係がある。展覧会などの彫刻に対して鑑賞する時とは別に、町角などに立っている銅像は妙にロマンチックな淋しさをともなっている。

来たというダ・ビンチ像が印象に残った。彫刻そのものの印象というより、まわりの風光と一語になった美しさであった。ナボリの町のガリバルディの銅像も美

しかった。昔私は銅像作家の弟子となつて銅像作りを手伝った。先生は本山白雲先生といつて高村光雲先生の弟子である。本山先生は光雲先生を手伝つて上野の西郷隆盛の銅像の原型を作ったのである。

その頃は銅像の原型は木彫であった。本山先生も光雲先生といつしよに木をけずりあの西郷さんを作ったのである。原型は鹿児島にあり、戦前私も一度見た事があるが、或は空襲で焼けたかも知れない。私が弟子になつた頃の本山先生は坂本龍馬の銅像を作り終えて、これから、鑄造工場へはこび出す時だった。その頃は銅

体はしつこいで、今でいえばモルタル塗りの建てももの様なものであった。顔はねんど作りで、本山先生はその頃珍しいといわれた油土をイタリーから取寄せて作っていた。

明治の偉い人を次々に作るので知名の人がよくアトリエへ見えた。若い頃の板垣退助を作ったときは、宮内大臣の田中光顯氏が来た。幕末のにおいする人だったので私はきんちようした。

その板垣退助の像のわらじは私が作った。望月圭介も来た。時の大臣であった。昔の大臣は今と違い、殿様の様を警護で、私服や正服の警官が遠く迄立たされていった。

本山先生の銅像は土佐へ行けば沢山見られるが東京では少なくなった。国会の横にある伊藤博文は其の代表的なものである。戦争中に銅像はほとんど砲弾にかわつて行つた。私の作った板垣退助のわらじも銅像がつぶされた時一緒に消えてしまった。

銅像は時代の産物で戦前は西洋式の古い様式だった。そして個人の名譽や武勲をうたつたものが多い。彫刻には作者の名はあつても銅像には作者の名は出ない。そこが私は面白い。スターリンがにくまれると銅像の首を落とすのである。芸術ではない位本人がせり出しているのである。本人とは別に本人を作る銅像作家の悲しさが私にとってロマンチックである。



坂本龍馬

野口昂明・画